

ベラルーシ公開情報とりまとめ

(10月10日～10月16日)

2022年12月22日

在ベラルーシ大使館

【主な出来事】

●ベラルーシ・ロシア連合国家地域軍集団がベラルーシに展開(10月16日)

【ルカシェンコ大統領動静】

●軍・治安機関幹部との会合

大統領の発言は要旨以下のとおり。

- ・10月9日、非公式に、ウクライナからベラルーシに対する攻撃について警告があった。
- ・プーチン露大統領と、ロシア・ベラルーシ両国地域軍集団を展開することで合意。同集団の展開は既存の文書に基づくもの。中核はベラルーシ軍でロシア軍も来るが千人ということはない。
- ・ベラルーシ領で戦争が起こらないよう、必要なあらゆることを行うこと。軍と国家保安委員会(KGB)には、状況をコントロールしてそれに対応するため、あり得べき総合的な措置を準備しておくよう指示。諜報関係者は気を緩めず、国境付近で生じている全てのことを周知しておくこと。

(10月10日 大統領府)

●軍・治安機関の指揮命令系統の改組(10月10日付大統領決定第356号)

- ・10月6日付法律「ベラルーシの国家保安機関に関する法律の改正について」を踏まえたもの。
- ・国家保安機関は専らルカシェンコ大統領に服属。
- ・関連教育機関は、共和国国家保安学院に改組。
- ・政府と国家保安委員会(KGB)は2023年1月1日をもって、改正を実施する。

(10月10日 大統領府、「ゼルカロ(鏡)」)

●アジア相互協力信頼醸成措置会議(CICA)に出席(於アスタナ)

大統領は要旨以下を述べた。

- ・ベラルーシは旧ソ連圏において、核兵器の保有を自発的に放棄した国の一つであった。
- ・しかし得られたものは、実効性のある国際的な法的

基盤の代わりに、平穏で勤勉なベラルーシの情勢を絶えず不安定化させようとする試みであり、2020年には外国勢力があからさまに反乱の糸を引いていた。

- ・西側が他国における政権転覆を実施し、制裁によって他国を罰していることで、第3次世界大戦のリスクが高まっている。

(10月13日 大統領府、「ゼルカロ(鏡)」)

●独立国家共同体(CIS)首脳会合に出席(於アスタナ)

アスタナ滞在中、ルカシェンコ大統領は、ベラルーシ国内で対テロ体制を強化していること、それを踏まえ、ベラルーシ軍を主体とする連合国家地域軍集団のベラルーシへの展開を開始した旨発言。

(10月14日 露タス通信、「ゼルカロ(鏡)」)

●米国メディア「NBC」のインタビュー(於アスタナ)

大統領は要旨以下を述べた。

- ・ウクライナでの紛争では、ロシアも西側も勝利を収めていない。和平交渉の座に着いて合意することが求められている。ベラルーシはロシアが提案する和平交渉に賛成。
- ・最も大切なことは、対話の相手を、たとえ敵対者であるとしても、窮地に追い込んではならないということ。核兵器使用に関するロシアの立場は明確で、ロシア領に対して攻撃がある場合、ロシアは必要に応じてあらゆる形態の兵器を使う可能性がある。しかし、ロシアは核使用を目的にしていない。ロシアは最新の形態の兵器を保有しており、核兵器なしでやりおおせる。核使用は地球の終わりであり、この紛争の平和的な解決の道筋を模索する必要あり。
- ・ベラルーシは、①ベラルーシを経由してロシア軍部隊が背後から攻撃されたりしないためのベラルーシ・

ロシア連合国家の国境の防備、②ロシア人やウクライナ人に対する治療、食事や避難所の提供を通じてロシアの軍事作戦に参加。ウクライナでの戦闘に参加するようロシアから求められておらず、参戦するつもりもない。

(10月14日 大統領府)

【外交】

●先進7か国(G7)首脳テレビ会議

- ・ロシアによるクリミア占領と「併合」を非難。
- ・ロシアに対し、軍事行動を停止してウクライナからの軍の引き揚げを要請。
- ・今後とも引き続きウクライナを支援。
- ・ベラルーシ当局に対し、ロシアによるウクライナ侵略への負担を止めるよう呼びかけ。

(10月11日 「ゼルカロ(鏡)」)

【内政】

●10月11日現在の政治犯の数は1,352人

(10月11日 人権団体「ヴァスナ(春)」)

【治安・軍事】

●ベラルーシ・ロシア連合国家地域軍集団がベラルーシに展開

- ・ロシアから航空部隊も展開。
- ・ベラルーシに到着する部隊の総数は、兵員9,000人まで、戦車約170両、装甲戦闘車両200両まで、口径100mm以上の武器及び迫撃砲100門まで。
- ・ベラルーシ・ロシア連合国家の脅威として、連合国家国境付近での北大西洋条約機構(NATO)の行動活発化に加え、ベラルーシでの政権転覆に向けた働きかけを懸念。

(10月16日、17日 レヴェンコ国防省国際軍事協力局長 Twitter)

●ベラルーシに露軍のMiG-31戦闘機が飛来

- ・10月16日、ミンスク上空でロシア航空宇宙軍のMiG-31戦闘機が確認された。
- ・空中発射型弾道ミサイル「キンジャル」を運用可能なMiG-31Kの場合、ロシアがベラルーシ領から「キンジ

ヤル」を発射する可能性も、ウクライナや西側に対する脅迫である可能性もあり。

- ・「キンジャル」運用非対応の機体の場合、早期警戒管制機(AWACS)の代用として、戦闘機や爆撃機からウクライナに発射されるミサイルの誘導に使用される可能性あり。

(10月17日 「ゼルカロ(鏡)」)

●ベラルーシ軍の準備状況に関する高級将校による匿名コメント

- ・ベラルーシ軍の圧倒的他薄の舞台は充足率が低く、よくて定員の半分。機材は十分にあるものの使用する者がいない。
- ・ベラルーシ軍の部隊の兵員不足が、動員されたロシア兵によって埋め合わされる可能性はない。そのような部隊があると、誰が誰を指揮するのかという問題が生じる。そのようなことは、ルカシェンコがベラルーシ軍の部隊の指揮権をロシアに引き渡す場合にのみあり得る。
- ・ルカシェンコが参戦するかどうかは、動員の有無で判断できる。現在進行中の、武器を配布し、応召兵を訓練のためにベラルーシの演習場に受け入れる準備をするといった全ての行動は、従来から計画されていたこと。動員なしでベラルーシはウクライナと戦うことなどできない。

(10月11日 「我らの家(ナシャ・ニヴァ)」紙)

●ベラルーシ・ウクライナ国境地帯への国際監視団の派遣の提案

- ・10月11日、ゼレンスキー・ウクライナ大統領は、ウクライナ・ベラルーシ国境地帯に国際監視団を派遣するよう提案。
- ・これに対しヴォリフオヴィチ国家安全保障会議国家書記は、国際監視団の派遣には反対しない旨述べた上で、同監視団が外国の軍のみで構成されることは断固受け入れられないと付言。
- ・マケイ外務大臣は、国際監視団の派遣は第三国をウクライナの紛争に引き込むこととコメント。

(10月12日 大統領府発行「ソヴェツカヤ・ベロルシア」紙、国营ベルタ通信)

●ベラルーシから欧州への不法越境の試み

(10月10日～10月16日)

- ・リトアニア国境警備局は少なくとも222人を阻止。
- ・ラトビア国境警備隊は少なくとも74人を阻止。
- ・ポーランド国境警備隊は少なくとも437人を阻止。

(10月11日～10月17日 BPN)

【抗議勢力の動き】

●チハノフスカヤ民主勢力代表は、欧州議会外務委員会に出席(於ブリュッセル)

- ・ルカシェンコ体制がクレムリンの操り人形に堕していることを指摘した上で、ベラルーシ国民を真に代表する機関として「統一移行内閣」を承認するよう呼びかけ。

(10月13日 チハノフスカヤ氏公式ホームページ、「ゼルカロ(鏡)」)

【その他】

●「社会進歩指数(Social Progress Index)2022」で、ベラルーシは169か国中61位(前年は54位)

- ・同指数は、米国の非営利団体「Social Progress Imperative」が集計しているもの。
- ・ベラルーシは、基本的な教育へのアクセス、栄養・基本的な医療サービス、水・衛生等は高得点である一方、個人の権利、障害のある人を排除しないこと(inclusiveness)、個人の安全等の得点は低い。

(10月10日 「ゼルカロ(鏡)」)

●「世界イノベーション指数(Global Innovation Index)2022」で、ベラルーシは132か国中77位(前年は62位)

(10月11日 世界知的所有権機関(WIPO)、「ゼルカロ(鏡)」)

(了)